

Glocal Tenri



7

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.16 No.7 July 2015

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
牛のゲップの CO₂
／深谷忠一 1
 - ・ 天理教教理史断章 (94)
近愛文書⑤
／安井幹夫 2
 - ・ 『教祖伝』探究 (13)
魂のいんねん
／深谷忠一 3
 - ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」
的世界観への未来像～ (15)
第2章 本居宣長『古事記伝』③
／井上昭夫 4
 - ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (4)
「うを」について④
／佐藤孝則 5
 - ・ 「おふでさき」の有機的展開 (最終回)
総括
／深谷耕治 6
 - ・ 「おさしづ」語句の探求 (7)
『天理教教典』における「道」⑤
／澤井治郎 7
 - ・ ライシテと天理教のフランス布教 (3)
ライシテとは何か?③
／藤原理人 8
 - ・ 新宗教のブラジル伝道 (27)
日本の新宗教の組織的展開⑩
／山田政信 9
 - ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ
関係試論 (2)
大河と文明
／森 洋明 10
 - ・ 地域福祉を拓く ―新たな寄付文化の創造
― (7)
広島県共同募金会「社会課題解決プロジェクト」
／渡辺一城 11
 - ・ 遺跡からのメッセージ (2)
遺跡がつなぐ過去と現在②
／桑原久男 12
 - ・ 現代宗教と女性 (4)
「父なる神」と隠喩の力
／金子珠理 13
 - ・ English Summary 14
 - ・ おやさと研究所ニュース 15
- 第61回伝道研究会「文化活動を視点においた『コロンビアの道』」／第4回宗教文化セミナー「多様化する『家族』のあり方に向き合う」に参加 (深谷忠一)／南アジア・南東アジア文化と宗教学会の第6回大会で発表 (堀内みどり)／平成27年度公開教学講座のご案内／『グローカル天理』合本のご案内／「出前教学講座」申し込み受付／おやさと研究所ホームページのご案内

巻頭言

牛のゲップの CO₂

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

米海洋大気局 (NOAA) は、今年3月の世界の大气中の二酸化炭素 (CO₂) 濃度が、月平均で地球温暖化の危険水準とされる 400ppm を、観測史上初めて超えたと発表しました。この CO₂ 濃度は、地質学的な証拠からしても、過去数百年間になく水準だとされます。

多くの気候科学者が、地球の平均気温が、産業革命の時に比して 2℃上がれば、食料、水、健康、土地、安全保障、エネルギー、経済活動など、文明のすべての分野に被害が出ると考えています。そして、それを回避するためには、CO₂ 濃度を 405ppm 以下に抑えねばなりません。世界が現在のペースで化石燃料を燃やし続けられれば、22年後の 2036 年までにその濃度を超えると危惧されているのです。

その危機を回避するためには、化石燃料からの脱却以外にも、種々対応を考えねばなりません。その一つとして、「牛のゲップの環境破壊力」という記事がある雑誌に掲載されていました。(『ニューズウィーク』日本版 5月19日号)

牛などの4つの胃袋をもつ反すう動物の消化器には、食物繊維の消化吸収を助ける大量の微生物が生息していて、それらが食物繊維を分解する過程で二酸化炭素とメタンガスを排出する。そのガスはゲップやおならで体外に出るのだが、その量が半端なものではない。1頭の牛が排出する温室効果ガスは、二酸化炭素に換算すると、小型の車1台分に相当する。国連食料農業機関 (FAO) の統計では、牛のメタンガスの総排出量は、世界の温室効果ガス排出量の約4%にもなると言われ、自動車などの輸送機関による排出量14%に比べても、決して無視できない量なのです。

それで、カナダ政府とオランダの化学会社が共同で、牛の飼料に混ぜてガスの発生を抑制する薬品の開発を進めている。また、牛へのワクチン接種で微生物の働きを抑えてガスの発生を防ぐ研究も、ニュージーランドで進められているというのです。現状では、このガスの発生を抑制する薬品の試薬で60%、ワクチンの接種で30%の牛のゲップによるガスの削減成果が報告され、2年以内の実用化が期待されていると言われます。

この「牛のゲップ削減計画」が成功するためには、薬入りの飼料やワクチンを使う牛肉の安全性とその費用の負担が問題になりますが、それに対して、たとえば、生産者には、「メタンの発生を抑えるとそのエネルギーが牛の肉量や乳量の増加に回る」また、消費者には、「クリーンな牛肉が、美味で健康によい」などの効果を示せるようになれば、この計画が加速的に進展する可能性も出てくるでしょう。

しかるに、一方、牛のクリーン化を宣伝すれば、かえって牛肉や乳製品の大量消費に繋がることも考えられます。よって、食肉・乳製品業界への配慮をしつつ牛肉や牛乳の摂取を減らして、代わりに鶏肉や豚肉、また豆乳などを摂ることが、心臓疾患、癌、糖尿病の予防に役立つなどの啓蒙活動なども必要になるでしょう。

いずれにしても、発電所や工場、あるいは運輸機関などによる化石燃料の燃焼の削減・停止を目指すだけでは足りずに、牛のゲップによる CO₂ 濃度を下げる研究が必要なほどに、地球温暖化の危機が拡大していると考えられており、その対策が練られているということなのです。